

書評

次の 15 年：世界銀行グループの 2030 年目標と国連の SDGs 2030

浅沼 信爾
一橋大学客員教授

The World Bank, *A Measured Approach to Ending Poverty and Boosting The Shared Prosperity: Concepts, Data, and the Twin Goals*, (A Policy Research Report), 2015, Washington, D.C.: The World Bank

2013 年 4 月に、世界銀行は 2015 年を起点とする次の 15 年間の目標を発表した。第一の目標は、2030 年までに世界の貧困人口を世界の総人口の 3%まで削減すること、そして第二の目標は、すべての国において、下位の 40%に属するグループの平均所得の増大を目指す、すなわち「繁栄を共有する」ことだ。この二つの目標は、それぞれ独立したものではなく、相互に深く絡み合っている。そこで、世界銀行は、その 2030 年の目標を「双子の目標」と呼んでいる。

ここに紹介する世銀の政策研究報告書（Policy Research Report）は、世銀が設定した目標を達成するために、目標を政策策定に耐えるようにどのように定義すれば良いか、目標達成をモニターするには、どのようなデータや推計が必要か、目標達成のためには、どのような政策手段が必要とされるか、また目標を達成できる現実的な見通しがあるか、等々の政策目標と政策手段の諸問題を詳しく分析している。

概念や統計についての細かい議論は、報告書に譲ることにして、世界銀行がこの双子の目標を選んだ意義を考えてみよう。世界銀行本部の建物に入ったところには、「われらの夢は、貧困の無い世界」という標語が掲げられている。ウェルフェンソンが総裁になってから、世銀の究極的な目標は貧困削減とされた。だから、世銀にとって貧困削減は目新しいことではない。それにも関わらず、世銀はこれまで貧困削減の数値目標を立ててこなかった（あるいは MDGs を自身の目標にしてきた）。今回が初めてだ。そして、その数値目標を 2030 年までに世界人口の 3%としたのは、ゼロ%を目標にすれば、その達成にかかるコストが膨大になり、実現可能性に疑義が生じるからだ。達成のための主たる政策手段は、経験から、明らかに経済成長以外に考えられない。報告書では、いろいろな試算やシミュレーションが紹介されている。単純には、すべての国で一人当たり所得の年率 4%成長（全世界ベースでは、2000 年から 2010 年の間にこの成長率が達成された）が実現できれば、目標は達成される。しかし、それが無理な注文なのは明白だ。より現実的に、すべての国がそれぞれの過去 20 年間の平均成長率を達成できた場合には、2030 年の世界貧困人口の比率は 6.8%にしか達せず、3.8%

のギャップが生じる。明らかに、経済成長だけでは目標達成は無理で、貧困層の集中する農業の労働生産性の改善や労働集約的産業の振興等の個別の、貧困層に焦点を合わせた開発政策、産業政策が必要になる。

では、第二の目標はどうか。すべての国で下位 40%の所得水準にあるグループの所得を加速的に上昇させようというのがこの目的だ。世銀が目指すところは、「包摂的な成長」で、平均的な中産階級に照準を合わせている。また、最近の格差の議論を反映して、全国平均の所得水準ではなく、下位から平均的な中産階級を含むグループの所得水準を問題にしている。目標をこのように設定することによって、第一の目標とのトレードオフは捨象できるし、また同時にもっと一般的に、成長と格差のトレードオフさえも、巧妙に回避した目標設定になっている。

この目標の特徴はそれだけにとどまらない。この目標には、2030年までに到達すべき数値目標がない。世界のそれぞれの国には、それぞれ特有の成長のための条件があり、包摂的成長のための戦略や政策は、それぞれの国が策定せざるを得ない。そのうえに、それぞれの国の潜在成長率には差異があり、数量的な目標設定は不可能だ。だから、世銀のこの報告書では、この目標に限っては、「多々ますます弁ず」の努力目標と位置付けている。

2015年のポスト MDGs の議論を待たずに、世銀が独自の 2030年目標を発表した意味は、どのように解釈すれば良いのだろうか。世銀といえども、組織として一枚岩ではないし、理事会にはそれぞれ意見の違う国の代表が座っている。だから、深読みの誹りを免れないことを承知で、極論を言わしていただければ、世銀はこの目標設定によって、1990年代から続く「MDGs フェスタ」や国連外交官、開発援助関係者や INGO の「SDGs をめぐる狂宴（カーニバル）」に決別を宣言したのではないだろうか。SDGs は 17 の目標（ゴール）と 169 個に上る達成数値目標（ターゲット）からなっている。スーパーマーケットのチラシに書かれた品目表のような、全世界の願望を表にしたもので、現実的な国際開発政策のガイドなどになれない、ポピュリスト運動のマニフェストとでも呼ぶべき代物だ。テクノクラティックな政策実践を旨とする世界銀行には、とうてい受け入れがたいものであるはずだ。

世銀としては、表立って国連主導の SDGs に反対するわけにはゆかない。そこで、SDGs の議論に先立って、独自の、開発政策の指針になりうる目標を設定して、発表したのではなかろうか。長年世界銀行をホームグラウンドとして、途上国の開発政策や事業に関わってきた一人として、私は個人的にそうであって欲しいと願う。